

心の一步

小 五

ある日のことです。わたしは、家族や友達と、さいたま新都心のイベントに来ていました。わくわくしながら、目当てのワークショップの場所をさがしていると、たくさんの人ごみの中、一人の男の子のすがたが目飛びこんできました。不安そうにきよろきよろしていました。すぐに、その子は迷子だと分かりました。でも、わたしは、どうしたらいいのか分かりません。何人もの大人が、気付いていないのか、その子の横を通り過ぎていきます。わたしは、心がもやつとして、冷たいなと思いました。よく見ると、男の子は泣いています。わたしは、

「どうしよう、どうしよう。」と頭の中がパニックになってしまいました。友達もおろおろしています。時間が止まってしまったような感じがしました。「そうだ、お母さんたちにお願いしよう。」と後ろをふり返ると、はなれたところに交番があるのが見えました。もうやるべきことは、男の子を交番に連れていくことだけです。それなのに、わたしは体が動きませんでした。声をかける勇気がなくて、ただ男の子と交番を交ごに見ているだけでした。そのとき、全てに気付いたお母さんが、わたしのところに来て、すつとしゃがんでわたしの目を見ました。そして、
「あなたならできるよ。」
とやさしく言ってくれたのです。ふっと迷いが消えて、わたしの足は、一直線に

男の子に向かっていました。

「どうしたの。」

と男の子に、やっと声をかけることができたのです。男の子は、ちよつとびっくりにした様子で、けいけいしたのか後ずさりしました。それでもわたしは、やさしく声をかけて、交番まで連れていくことができました。おまわりさんに男の子のことを伝えると、男の子は少し安心したような顔になりました。

その後、イベントを回っていると、覚えのある男の子が、お母さんと歩いているのが見えました。わたしは、すごくうれしくなって、幸せな気持ちになりました。こんな気持ちは初めてです。もし、あのまま何もできないでいたら、私の心は、ずっと、もやもやしていたと思います。後かいするよりは、声をかけて助け

るのが一番だと、わたしは思いました。ただ、またわたしの目の前でこまっている人がいたら、同じように行動できるのだろうか……。やっぱり迷ってしまうかもしれません。

そんなことを思うようになった数週間後、わたしは、弟と初めて一人きりとなり町の祖母の家に行くことになりました。大喜びの弟の手を引いて、わたしはきんちょうしながらバスに乗りました。と中、ガタンとバスがゆれて、前の席にすわっていたおばあさんの荷物が、ゆかに散らばりました。おばあさんは、あわてて拾おうとしています。ところが、こしが悪いのか立つだけでふらふらしています。わたしは、とっさに席を立てて落ちていたものを拾い集めました。そして、おばあさんに荷物をわたす

と、おばあさんは、わたしの目を見てやさしく、

「ありがとう。本当にありがとうねえ。」
と言ってくれたのです。わたしは、またあの何とも言えない幸せな気持ちに包まれました。

できるのか不安だったのに、わたしはすつと手を差しのべることができたのです。ひょうしぬけするぐらい、迷わず行動した自分におどろきました。なぜできたのだろうと思いついてみたとき、気付いたのです。

前回は、男の子がこまっていることにわたしは気付いたのに、周りの大人や親がやってくれるかもしれないと、他人任せにしようとする自分がいました。でも、おばあさんのときは、ちがいます。「こまっている」と気付いたとき、自然にわ

たしの体は動いていたのです。相手の立場になつて考え、相手を思いやることで、一歩ふみ出す勇気が出てきたのです。わたしの心は、大きくゆれ動きました。

「こまっている人がいたら助ける」この単じゅんで当たり前のことを、わたしは、当たり前前にできる人になりたいです。